

国際スポーツ大会に対するイメージと 日本人意識・グローバル意識との関係について ——2024年パリオリンピックを事例として

山 下 玲 子

1. 問題

1.1 平等で持続可能な五輪を目指した2024年パリオリンピック

2024年パリオリンピック（以下、パリ五輪）は、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の世界的流行のために1年延期で開催された2020年東京オリンピック（以下、東京五輪）の3年後に開催されたオリンピックである。無観客かつ海外選手の入国制限や厳重な外出制限など多くの制限の下で開催された東京五輪や、その半年後に厳格な新型コロナ対策を施して開催された2022年冬季北京オリンピック（以下、北京冬季五輪）と異なり、パリ五輪は従来の大会同様に有観客で、海外からの観客も数多く訪れた（Ledsom, 2024）。また、フランステレビの発表によると、開会式のフランス国内での視聴率は83.3%であり、大会期間内約6,000万人、4歳以上の国民の95%がパリ五輪をテレビで見たという（片岡, 2024）。さらに、IOCはパリ五輪に世界人口の半数を超える50億人が関心を示し73%が「成功」と評価、東京五輪の65%を上回ったとの調査結果を発表している。そして、チケットの売り上げは史上最多の約956万枚だったという。日本国内でも注目を集め、オンラインでも注目度が高く、SNS上では2億7千万件の投稿があり、テレビや動画での1人当たりの中継視聴が平均約9時間であり、東京五輪より20%増えたという（共同通信, 2024）。

このように、国内外で注目を集め、興行上でも人々の評価においても成功を収めたとされるパリ五輪であったが、そのコンセプトもこれまでの大会とは一線を画したものとして、開催前から耳目を集めていた。その主たるものは、男女平等と持続可能性である。史上初めて、選手比率が男女同数となり、また、革新的なエネルギーモデルにより二酸化炭素排出量を前回大会より半減させることを約束していた（Peene, 2024）。そして、パリ五輪をアスリートだけでなくすべての人にとっての大会にするよう、マラソンと自転車ロードレースに一般クラスを開催したり、表彰式をスタジアム内ではなく公共の場で実施したりするなど、一般市民に身近に感じられる取組が行われた。競技施設も、既存の施設を利用するのに加え、エッフェル塔やヴェルサイユ宮殿、1900年のパリ万博会場として建てられたグラン・パレなど

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

有名なモニュメントやランドマークが会場として使用された。

採用された競技も特徴的で、ブレイクダンスの競技である「ブレイキン」が新たに採用された。国際オリンピック委員会（IOC）は、オリンピックの魅力向上と若年層の取り込みを目指し、アーバンスポーツの導入を積極的に推進しており、トマス・バッハ会長（当時）は東京五輪で初めて採用されたスケートボードや、自転車BMX競技などのアーバンスポーツを「革新のピース」と呼び、その重要性を強調している（日本経済新聞、2024）。これらの競技の採用は、スポーツの都市化と若者への魅力度の向上を目指すもので、五輪の若者における人気を回復することで持続可能な大会を目指す試みとみなされている。

そして、パリ五輪の開会式で、バッハ会長（当時）は男女同数大会を強調し、五輪が平和をつなぐ祭典であることを約8分間にわたり熱弁した（サンスポ、2024）。閉会式でも、パリ五輪は平和の文化を作り、男女同数を実現した新たな時代の五輪であったとし、その舞台を用意してくれたフランスすべての人々に感謝の念を表明した（読売新聞オンライン、2024）。すなわち、パリ五輪は、オリンピズムの目的である、「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てること」（日本オリンピック委員会、2025, p.9）をいかんなく体現できた大会であることを、会長自らが表明したのである。

1.2 日本人にとってのパリ五輪

このように、すべての人にとって平等で持続可能な平和の祭典であることを世界中に知らしめたように見えたパリ五輪であったが、日本人はこの大会をどのように感じていただろうか。

まず、パリ五輪の日本選手団の戦績を見てみる。メダルの獲得数は金メダル20、銀メダル12、銅メダル13の45個であり、金メダル27個を含む総メダル獲得数58個であった東京五輪に比べると減少したもの、2016年のリオオリンピックの41個（そのうち、金メダル12個）を上回り、日本国外で開催された大会では史上最高の成績となった（日本オリンピック協会発表）。しかしながら、パリ五輪では東京五輪で男女とも金メダルを獲得した野球・ソフトボールが競技から除外されたり、お家芸といわれる柔道では男女混合団体で東京五輪に続きフランスに敗れ銀メダルに終わった上に、優勝決定戦においてデジタルルーレットで決められた階級がフランスのスターであるリネール選手を擁する男子90kg超級であったなど「出来レース」を疑われる事態に遭遇するなど（「週刊文春」編集部、2024），悔しさと疑惑の残る大会であったようにも思われる。他方、フランスの国技ともいえるフェンシングで男子フルーレ団体が金メダル、女子フルーレ団体が銅メダル、ヨーロッパが強豪とされる馬術団体で銅メダルを獲得したり、スケートボードのストリートで男女ともに金メダル、新競技のブレイキン女子でAMI選手が金メダルを獲得したりするなど、日本ではこれまで大々的に注目されていなかった競技や新競技での活躍も目立った大会であった。このように、パリ

五輪の戦績は日本人としての誇らしさと悔しさを同時に感じさせるものであったことが予想される。

また、パリ五輪大会そのものやその運営、経済効果、評価などについては、否が応でも東京五輪と比較して見てしまう側面はあったのではないかと思われる。たとえば、東京五輪の経費は、2013年の招致の段階では7340億円であった予算が、最終的には大会関連で1兆6989億円、関連費用も含めると3兆6845億円にまで膨れ上がった（毎日新聞、2022）。さらに、競技は無観客での開催となり、地元で開催される祝祭に参加する感覚も得られなかつたばかりか、大会の開催によって得られるはずの入場料収入やインバウンドによる経済的效果もほぼゼロとなったことで赤字額が2兆3713億円に上り（村上、2024）、それらを結果的に国と東京都が補填、すなわち税金で賄うことになった。それに比して、パリ五輪はそれよりも予算規模が小さく抑えられ、環境への配慮と地域住民にも開かれた大会を全面に押し出した大会となっていた。また、有観客かつ海外からの観光客の受け入れが可能であったため、開催期間中のパリ市内の観光客は20%増、ホテルの稼働率は80%を超え、海外の雑誌から「五輪の眞の勝者」はパリという評価を受けたりもしている（Ledsom, 2024）。このような社会的経済的な負担感や世界から受ける評価の違いは、日本国民にとってパリ五輪の成功を手放しで祝福する気持ちに水を差したかもしれない。

とはいえる、やはり日本国内でもパリ五輪の注目度は非常に高かったようである。日本国内でのテレビ中継や配信でのパリ五輪の視聴状況を見ると、開会式開催前の7月24日のサッカー女子一次ラウンドの中継から、閉会式の再放送や関連特番が放送された2024年8月12日までに1億548万3千人がオリンピックの関連番組をテレビ（放送）視聴していたことが明らかとなった（福岡、2024）。すなわち、日本の人口の約85%が何らかの番組を視聴していたことになる。最高視聴率をみると「バレーボール男子準々決勝・日本×イタリア」（2025年8月5日22:40～23:25、NHK総合）の23.1%で（スポニチアネックス、2024）、近年のFIFAワールドカップ日本戦や2023WBCの日本戦に比べると半分程度の数字であった。遠く離れた国での開催であったため、高視聴率は日本で視聴しやすい時間帯に中継された競技に偏る傾向があった。しかしながら、その分インターネット動画配信での視聴が堅調で、日本ではテレビ中継がなかった、日本戦ではない競技も再生数ベスト10に入っている（福岡、2024）、日本を応援するだけでなくスポーツそのものが楽しめていた姿も見て取れる。

1.3 日本人意識・グローバル意識と海外での五輪開催

それでは、このように海外で開催された五輪の評価は、日本人意識やグローバル意識とどのように関連するであろうか。山下（2024）は、東京五輪の開催直前、閉幕直後、北京冬季五輪閉幕直後の3時点でのデータを用いて、それぞれの時点で人々がオリンピックに対して抱くイメージについて検討している。その結果、オリンピックの開催は、共通してスポーツ

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

を振興し、平和を促進するといったオリンピックのポジティブなイメージを高め、政治・商業的に利用されているというネガティブなイメージを低めていたが、差別や対立を助長するというイメージは、大会により異なっていたことを示している。そして、その要因として、大会が自国開催であるか否か、また開催国の政治的な状況が関連していることが示唆された。また、開催国の違いにより、ナショナリズムや愛国心がイメージに逆方向に影響する可能性や、異文化を自国内に受け入れることに抵抗がないことが、逆に世界における差別や対立に対して鈍感にさせていることも示唆されている。このように、日本人であること、また、世界市民の一員であることという意識は、オリンピックイメージに大いに影響する可能性がある一方で、山下（2024）では、対象としている海外の五輪の開催地は中国の北京という東アジアの隣国であり、日本人が平時から国イメージを抱きやすく、またその時々の国同士の関係によりイメージが変わりやすい国でもあった。また、北京での開催は冬季五輪、そしてコロナ禍での開催という制限も加わっていた。そのため、日本から遠く離れたヨーロッパ、さらに、フランスという日本人にとって知名度も好感度も高い国での夏季五輪の開催に対しては、日本人意識やグローバル意識はまた違った影響をもたらしていることも予想される。

そこで本研究では、パリ五輪の開催に対して日本人が抱いたイメージが、日本人意識、グローバル意識によりどのように異なっていたか、探索的に検討を行うこととした。合わせて筆者らが2019年から継続的にデータを収集しているナショナリズム・愛国心、コスモポリタニズム意識、日本の誇り（ナショナル・プライド）について、経年変化を検討する意味でも改めて尺度の再検討を行う。なお、この研究を実施するにあたり、本研究は東京女子大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会より倫理審査不要の判断を受けている（R2023-107）。

2. 方法

2.1 調査対象者

日本在住の18歳～69歳の日本人1040名（男性520名、女性520名）。男女とも18歳～19歳に20名、20歳から69歳までの5歳刻みにかつ50名ずつを割り当てた。調査会社によるデータクリーニング後の有効回答者数は913であった。

2.2 調査方法と調査時期

セルフ型アンケートツールFreeeasyを利用し、筆者らが作成したWebアンケートを割付条件に合わせてFreeeasyの登録モニターに配信を依頼した。調査時期は、パリ五輪閉会直後の2024年8月18日で、この日にインターネット経由でアンケートの配信が開始されるよう依頼した。

2.3 調査項目（分析項目）

紙幅の都合上、本研究において分析を行った項目のみ記載する。

- ①ナショナリズム・愛国心を測定するものとして、Karasawa (2002) のナショナリズム・愛国心を参考としたナショナリズム・愛国心尺度（村田ほか、2005）を参考にして作成した16項目に、1：「全くそう思わない」～7：「非常にそう思う」の7件法で回答してもらった。
- ②日本の誇りを測定するものとして、辻（2008）のナショナル・プライド12項目を参考に、17項目を設定し、1：「全く誇りに思わない」～4：「非常に誇りに思う」の4件法で回答してもらった。
- ③グローバル意識を測定するものとして、岩田（1998）のコスモポリタニズム尺度の第2因子（異文化体験志向）4項目および第3因子（運命共同体意識）4項目に、「外来文化を積極的に取り入れることは日本にとってプラスになる」など外国へ門戸を開放することへの賛否を問う質問2項目、「自分の同僚やクラスメートに外国人が増えることに不安を感じない」など身近に外国人がいることの賛否を問う2項目を加えた計13項目を1：「全くそう思わない」～5：「非常にそう思う」の5件法で回答してもらった。
- ④パリ五輪が開催されて感じたこととしてポジティブな内容12項目、ネガティブな内容7項目の19項目の尺度を独自に作成し、1：「そう思わない」～3：「そう思う」の3件法で回答してもらった。
- ⑤フェイス項目：割付条件として設定した年齢（18・19歳、20歳から69歳までの5歳刻みの11段階、計12段階）、性別（男女のみ）のデータを、調査会社より回答に紐づけて提供してもらった。

3. 結果

3.1 尺度の検討

ナショナリズム・愛国心、グローバル意識（コスモポリタニズム意識）、日本の誇り、パリ五輪開催に対して感じたことについて、因子分析（最尤法・プロマックス回転）により、因子を抽出した。

（1）ナショナリズム・愛国心について

ナショナリズム・愛国心については、全項目に対して因子分析を行った際に因子負荷量がいずれの因子にも .40 に満たなかった1項目（日本人は他の民族に比べて、とりたてて優秀な民族だとは思わない）を除外した15項目に対して再度、因子分析を行った。その結果、3因子が抽出され、それぞれ第1因子を「愛国心」（「日本人でよかったと思う」、「日本が好き

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

表1 ナショナリズム・愛国心の因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
Factor1 愛国心				
日本人でよかったと思う	.954	-.001	-.098	.794
日本が好きだ	.900	-.119	.096	.775
日本人であることに、幸せを感じている	.835	.076	-.027	.764
日本人は幸せである	.673	.119	-.096	.493
日本人であることを誇りに思う	.610	.178	.161	.759
日本にはあまり愛着をもっていない	-.584	.069	-.138	.401
Factor2 ナショナリズム				
日本の経済力を考えれば、国連や国際会議における日本の発言権はもっと大きくあるべきだ	-.137	.850	.079	.654
日本はいろいろな分野で世界をリードすべきである	.029	.745	.019	.608
日本の大幅な貿易黒字は優れた技術と努力の結果である	.247	.546	-.078	.479
日本が戦後驚異的な成長を遂げたのは、日本人が勤勉であったからだ	.216	.543	-.037	.478
Factor3 日本の伝統・象徴重視				
「君が代」を聞くと気持ちが高まる	-.091	.029	.800	.579
式典などで「君が代」を歌う必要はない	.047	.099	-.749	.431
「日の丸」はすばらしい国旗である	.109	.049	.712	.680
神社・仏閣に参拝することは日本人として望ましい	.089	.147	.482	.435
天皇は日本の象徴としてふさわしい	.206	.097	.474	.500
因子寄与	6.622	5.834	5.501	
因子間相関				
	Factor1		.735	.667
	Factor2			.683

だ」など6項目), 第2因子を「ナショナリズム」(「日本の大幅な貿易黒字は優れた技術と努力の結果である」, 「日本はいろいろな分野で世界をリードすべきである」など4項目), 第3因子を「日本の伝統・象徴重視」(「『日の丸』はすばらしい国旗である」, 「神社・仏閣に参拝することは日本人として望ましい」など5項目)と命名した(表1参照)。

(2) コスモポリタニズム意識について

グローバル意識については、全項目に対して因子分析を行ったところ、2因子が抽出された。しかしながら、筆者らのこれまでの研究において4因子が抽出されてきたことから(山下・有馬, 2025), 抽出する因子数を4に指定して、再度因子分析を行った。第1因子は、「もっと日本はいろいろな部分で外国に対して門戸を開放した方がよい」「外来文化を積極的に取り入れることは日本にとってプラスになる」など3項目で構成され、「門戸開放意識」と命名した。第2因子は、「いかなる民族も誇るべき文化を持っている」, 「発展途上の貧しい

表2 コスモポリタニズム意識の因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
Factor1 門戸開放意識					
もっと日本はいろいろな部分で外国に対して門戸を開放した方がよい	.678	-.062	.005	.194	.587
外来文化を積極的に取り入れることは日本にとってプラスになる	.619	.093	.048	.056	.561
裕福な国はかなり犠牲を払っても貧しい国を援助すべきである	.433	.030	.067	.096	.316
Factor2 文化平等主義					
いかなる民族も誇るべき文化を持っている	-.059	.834	.005	.025	.656
発展途上の貧しい国々もわれわれ同様優れた文化を持っている	-.106	.821	.023	.036	.614
民族や文化に優劣はない	-.041	.622	-.105	.276	.488
将来に備えていくら努力をしても一国だけでは生き残れない	.317	.472	-.144	-.177	.330
地球上の国々は運命共同体である	.227	.456	.019	-.020	.392
Factor3 異文化体験志向					
できるだけ多くの違った国々に住んでみたい	-.053	-.285	.736	.137	.473
できるだけ多くの国の文化や生活について知りたい	.028	.219	.616	-.010	.582
外国の生活や文化に触れると感動する	.158	.212	.586	-.123	.600
Factor4 異文化受け入れ志向					
隣人が日本人であるか外国人であるかは気にしない	.054	.044	.052	.738	.673
自分の同僚やクラスメートに外国人が増えることに不安を感じない	.175	.025	.062	.465	.403
因子寄与	3.866	3.852	3.293	2.681	
因子間相関					
Factor1		.632	.697	.548	
Factor2			.482	.420	
Factor3				.529	

国々もわれわれ同様優れた文化を持っている」「地球上の国々は運命共同体である」など5項目で構成され、「文化平等意識」と命名した。第3因子は、「できるだけ多くの国の文化や生活について知りたい」、「外国の生活や文化に触れると感動する」など3項目で構成され、「異文化体験指向」と命名した。第3因子は、「自分の同僚やクラスメートに外国人が増えることに不安を感じない」、「隣人が日本人であるか外国人であるかは気にしない」の2項目で構成され、「異文化受け入れ指向」と命名した（表2参照）。

(3) 日本の誇りについて

日本の誇りについては、2因子が抽出された。第1因子は「日本の民主主義の現状」「社

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

表3 日本の誇りの因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	共通性
Factor1 社会制度・生活			
民主主義の現状	.766	-.186	.402
教育水準	.651	.033	.459
元号の存在	.640	.007	.416
生活習慣	.631	.150	.566
日本人の人柄	.617	.130	.522
自衛隊	.606	.081	.450
天皇の存在	.605	.079	.445
社会保障制度	.592	.024	.372
治安	.348	.318	.394
Factor2 文化			
伝統工芸	-.194	.928	.621
食文化	-.041	.749	.515
歴史的建造物	.039	.715	.555
自然	.085	.621	.475
科学技術	.339	.433	.529
医療水準	.356	.401	.508
スポーツ選手の活躍	.356	.390	.493
ポピュラー文化	.316	.374	.423
因子寄与	6.872	6.560	
因子間相関			
Factor1		.772	

会保障制度」「天皇の存在」「自衛隊」などの社会制度や「生活習慣」「日本人の人柄」など、日本人の生活態度を示す項目合わせて9項目から構成されたことから「社会制度・生活」と命名した。第2因子は「伝統工芸」「食文化」「歴史的建造物」など伝統文化や「スポーツ選手の活躍」など現代日本人の文化的活躍を示す項目合わせて8項目から構成されたことから「文化」と命名した（表3参照）。

(4) パリ五輪開催に対する評価について

パリ五輪が開催されて感じたことについて因子分析を行ったところ、4因子が抽出された。第1因子は、「スポーツの魅力が伝わった」「人々に感動や夢を与えることができた」「日本の選手たちが活躍できた」など5項目で構成され、「スポーツの祭典」と命名した。第2因子は、「パリのイメージがよくなった（負）」「フランスのすばらしさを世界に伝えることができた（負）」「パリのイメージが悪くなった」の3項目で構成され、「開催地悪イメージ」と命名した。第3因子は、「オリンピックが政治の道具に使われた」「紛争当事者（国・地域・宗

表4 パリ五輪開催に対して感じたことの因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
Factor1 スポーツの祭典					
スポーツの魅力が伝わった	.860	.001	.015	-.043	.693
人々に感動や夢を与えることができた	.840	-.017	-.022	-.023	.710
日本の選手たちが活躍できた	.778	.010	.031	-.145	.491
アスリートたちの努力が無駄にならなかった	.584	-.094	-.115	.019	.476
国を超えた友情が育まれた	.546	-.033	.020	.268	.539
Factor2 開催地悪イメージ					
パリのイメージがよくなった	.002	-.787	.120	.193	.740
フランスのすばらしさを世界に伝えることができた	.113	-.737	.140	.146	.672
パリのイメージが悪くなった	.020	.735	.314	.204	.696
Factor3 五輪批判					
オリンピックが国際政治の道具に使われた	.029	-.125	.751	-.167	.544
紛争当事者（国・地域・宗教など）の対立を激化した	-.166	-.176	.745	.009	.530
外国人に対する差別につながった	-.104	.130	.653	.111	.538
開催に反対であった人々の気持ちが無視された	.014	-.114	.612	-.022	.314
アスリートたちの気持ちが無視された	.051	.154	.582	-.061	.469
IOC（国際オリンピック委員会）のイメージが悪くなつた	.121	.256	.539	-.177	.573
差別問題を提起する場になった	.060	.025	.423	.218	.174
Factor4 平和の祭典					
紛争当事者（国・地域・宗教など）の対立を緩和した	-.118	-.007	.050	.762	.488
IOC（国際オリンピック委員会）のイメージがよくなつた	-.135	-.131	-.085	.672	.530
国家間対立があっても開催できることを証明できた	.231	.119	-.034	.557	.429
国際理解につながった	.258	-.106	.068	.492	.502
因子寄与	4.285	4.265	4.163	4.102	
因子間相関					
	Factor1		-.371	-.335	.530
	Factor2			.533	-.601
	Factor3				-.312

教など）の対立を激化した」「外国人に対する差別につながった」「開催に反対であった人々の気持ちが無視された」「アスリートたちの気持ちが無視された」など、ネガティブな内容6項目と、「差別問題を提起する場になった」の計7項目で構成されたため「五輪批判」と命名した。第4因子は、「紛争当事者（国・地域・宗教など）の対立を緩和した」「国家間理解につながった」「国家間対立があっても開催できることを証明できた」など4項目で構成され、「平和の祭典」と命名した（表4参照）。

表5 各クラスタの性別・年齢の構成

男性 (N)	女性 (N)	年齢	
		平均値	標準誤差
中庸	200	229	45.655 ^a
日本卑下	76	66	39.901 ^b
日本礼賛	102	90	46.130 ^a
肯定思考	70	80	43.960 ^{ab}

注)同じ添え字アルファベットの間には有意な差がないことを示す。

3.2 日本人意識・コスモポリタニズム意識によるクラスタ分析

3.1で抽出した愛国心・ナショナリズム3因子、コスモポリタニズム意識4因子、日本の誇り2因子の計9因子の因子得点についてクラスタ分析（ウォード法・ローデータによるユークリッド距離）を行い、回答者の日本人意識・コスモポリタニズム意識を分類した。 денドログラムの減衰を吟味した結果、4つのクラスタを抽出した。第1クラスタは、愛国心・ナショナリズムの3因子、日本の誇り2因子がすべて平均よりわずかに低く、コスモポリタニズム意識4因子がすべて平均よりわずかに低かった。そのため、「中庸型」と命名した。このクラスタが約半数を占めていた。第2クラスタは、コスモポリタニズム意識4因子が平均よりやや低く、愛国心・ナショナリズム3因子、日本の誇り2因子がすべて平均を大きく下回っていた。そのため「日本卑下型」と命名した。第3クラスタは、コスモポリタニズム意識4因子が平均を大きく下回り、愛国心・ナショナリズムの3因子、日本の誇り2因子はすべて平均を上回っていた。そのため「日本礼賛型」と命名した。第4クラスタは、愛国心・ナショナリズム3因子、コスモポリタニズム意識4因子、日本の誇り2因子すべてが平均を大きく上回っていた。そのため「肯定思考型」と命名した。それぞれのクラスタの人数、男女比、平均年齢は表5の通りである。各クラスタの性別の偏りは見られなかった ($\chi^2(3)=3.766, p=.288$)。また、平均年齢は、第2クラスタが第1、第3クラスタに比べ低かった ($F(3, 909)=6.498, p<.001$ 、偏 $\eta^2=.021$)。

3.3 日本人意識・グローバル意識によるクラスタによるパリ五輪開催に対する評価の違いについて

3.2で抽出したクラスタにより、パリ五輪の開催に対する評価が異なるか、平均値を比較した。4クラスタを独立変数、パリ五輪開催に対して感じたこと4因子の平均得点を従属変数として参加者間一要因分散分析を行った。その結果、「スポーツの祭典」では、有意水準0.1%でクラスタの主効果が見られた ($F(3, 909)=47.480, p<.001$ 偏 $\eta^2=.135$)。多重比較の結果(Holm法)、第1クラスタと第2クラスタ、第1クラスタと第4クラスタ、第2クラスタと第3クラスタ、第2クラスタと第4クラスタ、第3クラスタと第4クラスタとの間で、

表6 クラスタによる五輪開催に対する評価の平均値と標準誤差

スポーツの祭典			開催地悪イメージ		五輪批判		平和の祭典	
水準	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差
中庸	0.062 ^b	0.042	-0.078 ^b	0.044	-0.004 ^b	0.044	0.081 ^b	0.042
日本卑下	-0.698 ^c	0.074	0.207 ^c	0.076	0.228 ^a	0.077	-0.346 ^c	0.072
日本礼賛	-0.021 ^b	0.063	0.356 ^c	0.065	0.068 ^{ab}	0.066	-0.318 ^c	0.062
肯定思考	0.511 ^a	0.072	-0.429 ^a	0.074	-0.290 ^c	0.075	0.503 ^a	0.070

注) 同じ添え字アルファベットの間には有意な差がないことを示す。

すべて有意水準 0.1% で有意な差が見られた。因子得点の高さ（よかったですと思う度合いの高さ）は、第4クラスタ>第1クラスタ>第3クラスタ>第2クラスタの順であった。「開催地悪イメージ」でも、有意水準 0.1% でクラスタの主効果が見られた ($F(3, 909) = 24.783, p <.001$, 偏 $\eta^2 = .076$)。多重比較の結果 (Holm 法), 第1クラスタと第3クラスタ, 第1クラスタと第4クラスタ, 第2クラスタと第3クラスタ, 第3クラスタと第4クラスタとの間で有意水準 0.1%, 第1クラスタと第2クラスタとの間で有意水準 1% で有意な差が見られた。因子得点の高さ（悪かったですと思う度合いの高さ）は、第3クラスタ>第2クラスタ>第1クラスタ>第4クラスタの順であった。「五輪批判」でも、有意水準 0.1% でクラスタの主効果が見られた ($F(3, 909) = 8.242, p <.001$, 偏 $\eta^2 = .026$)。多重比較 (Holm 法) の結果, 第2クラスタと第4クラスタとの間で有意水準 0.1%, 第1クラスタと第4クラスタ, 第3クラスタと第4クラスタで有意水準 0.1%, 第1クラスタと第2クラスタとの間で有意水準 1%, 第1クラスタと第3クラスタとの間で有意水準 5% で有意な差が見られた。因子得点の高さ（悪かったですと思う度合いの高さ）は、第2クラスタ>第3クラスタ>第1クラスタ>第4クラスタの順であった。「平和の祭典」でも、有意水準 0.1% でクラスタの主効果が見られた ($F(3, 909) = 34.587, p <.001$ 偏 $\eta^2 = .102$)。多重比較の結果 (Holm 法), 第1クラスタと第2クラスタ, 第1クラスタと第3クラスタ, 第1クラスタと第4クラスタ, 第2クラスタと第4クラスタ, 第3クラスタと第4クラスタとの間で、すべて有意水準 0.1% で有意な差が見られた。因子得点の高さ（よかったですと思う度合いの高さ）は、第4クラスタ>第1クラスタ>第3クラスタ>第2クラスタの順であった（表6 参照）。

4. 考察

4.1 尺度の構成について

今回の調査では、愛国心・ナショナリズム尺度は、これまでの研究の多くと同様の 3 因子が抽出されたが、いずれの因子にも負荷量が低かった項目が 1 項目あった。それは、「日本人は他の民族に比べて、とりたてて優秀な民族だとは思わない」であったが、これは本来、

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

他国民や他民族と比較して自国民の優秀さを認識するナショナリズム因子の逆転項目として用意された項目である。この項目は、第2因子の因子負荷量の絶対値がもっとも高かったものの、値は.165であり（符号は負）、また他の2つの因子に対しても因子負荷量が負であった。したがって、この項目は逆転項目として機能しなかった可能性がある。また、現在の日本において国力が優れているということの認識に、他国より優れているという評価軸が有効でない可能性も示唆される。

コスモポリタニズム尺度では、今回は当初の分析では岩田（1989）の第Ⅱ、第Ⅲ因子と同様に2因子が抽出された。その分かれ方はおおまかに見ると、異文化を許容したり体験したりしたいと思う意識とあらゆる文化に優劣ではなく異文化同士が共同しないと生き残れないという意識であった。すなわち、異文化を自身が所属する文化と隔絶したものとして捉え、体験したり保護したりしたいという意識と、異なる文化を平等なものとして捉え、それに携わる人々を対等なパートナーとみなす意識とに分かれていたと考えられる。それらは表面的には同じ「異文化に対して理解がある」という態度として表れるかもしれないが、両者には異なる信念が関連している可能性がある。その意味では、後者は多文化主義を体現する価値観といえるが、前者には慈悲的差別（eg. Esposito & Romano, 2014）につながる価値観が根底にあることも予想される。今後は、このような「異なる形の異文化理解」ともいえる意識が国同士の威信をかけて争うオリンピックのような国際スポーツ大会に対する人々の態度にどのように影響するのか、詳細に検討を試みてもよいだろう。

さらに、日本の誇りについては、日本の現在の政治・社会状況や日本に独特の制度（自衛隊や天皇、元号など）を含む因子と、伝統文化および現代文化を象徴する事物を含む因子の2因子を抽出し分析に利用した。先行研究においても、ナショナル・プライドは同様の2因子に分かれることが示されている（市民（政治）的プライドと民族（文化）的プライド、cf. 田辺, 2016）。しかしながら、全17項目の α 係数は.928であることから、1因子構造とみなしてもよいかもしれない。特に、治安、ポピュラー文化、科学技術、医療水準、スポーツ選手の活躍は両因子に同程度に寄与していたことから、これらは日本特有の制度と日本人の人柄、文化の双方に結びついて誇らしさを感じさせるものとして捉えられているのである。日本は典型的な「民族型ネーション」であり、日本民族=日本国民と見なす人が大多数であると考えられることから、日本を誇るものとしての市民・政治的基準と民族・文化的基準の2つがあまり明確でないことが、この結果に反映されている可能性がある。

4.2 日本人意識・コスモポリタニズム意識によるクラスタについて

今回の調査では、日本人意識とグローバル意識の高低により4クラスタを抽出したが、回答者の約半数の429名が中庸型であった。すなわち、およそ半分の人は日本人意識もグローバル意識もさほど強くない人達ということがいえる。そして残りの半分の人達が、全体的に

否定的で特に日本人意識が弱い人達、グローバル意識が弱く日本人意識が強い人達、全体的に肯定的な人達に三分される、という状況であった。すなわち、排外的で日本礼賛的な人々（日本礼賛型）とシニカルで特に日本卑下的な人々（日本卑下型）、さらに日本に誇りを持ちかつグローバル意識も強い人達（肯定思考型）に分かれていた。このことは、愛国心の強さとグローバル意識を併せ持つことは可能であるということを示しているといえるだろう。齊藤（2020）は、日本におけるナショナリズムを類型化し、5つのタイプを抽出しているが、これと比較した場合、中庸型の人達はライト・ナショナリズム型またはカーム・ナショナリズム型に相当し、肯定思考型の人達はウルトラ・ナショナリズム型、日本礼賛型の人達はエスニック・ナショナリズム型、日本卑下型の人達はコスモポリタニズム型に近いと考えられる。また、齊藤（2020）においては、日本においてはロールズ流のリベラリズムを原理としたリベラル・ナショナリズム（Tamir, 1993=2006）の条件を満たすようなクラスタは存在しない、と結論付けられていたが、今回抽出された肯定思考型は、リベラル・ナショナリズム的な人達とみなすことができるかもしれない。ただし、この人達は単に楽観的で、何に対しても肯定的に回答する傾向がある人達であるということも否定できないため、リベラル・ナショナリズムが理想とする思想を体现しているかどうかは検討の余地がある。逆に、コスモポリタニズム型に近いと考えられる日本卑下型の人達は、コスモポリタニズム意識の4因子すべても全体平均を下回っており、世界市民的な視点も弱い人達であった。したがってこの人達は、世界市民的な立場から日本を批判的に見る人達というよりも、すべてにおいて否定的な厭世的な人達であることも考えられる。すなわち、ナショナリズムを否定することが、必ずしも世界市民的な視点と結びついていないということも示されたといえる。

4.3 クラスタによるパリ五輪開催に対する評価について

上記のクラスタにより、パリ五輪が開催されたことに対するポジティブな評価2因子、ネガティブな評価2因子について平均値を比較したところ、ポジティブな因子はいずれの項目でも「肯定思考型」の人達がもっとも感じており、ネガティブな因子はもっとも感じていなかつことが示された。これは、この人達が日本や日本人に誇りを持っており、また海外の人々との交流や相互扶助を求めている人達であることから、予想できる結果といえる。そして、このような人達は、五輪を国威発揚と国際交流を両方達成できる場として捉えていることが示されたといえるだろう。また、先述したように、この人達は何事も肯定的に捉える人達であった可能性もある。それとは逆に、日本卑下型の人達は、「スポーツの祭典」因子では非常に否定的であり、「平和の祭典」では肯定思考型や中庸型の人よりも否定的で日本礼賛型の人達と有意差がなかった。さらに「開催地悪イメージ」「五輪批判」でも、肯定思考型や中庸型の人達よりも肯定的（パリ五輪に対して否定的）であり、日本礼賛型の人達と有意差がなかった。このことから、日本卑下型の人達は、パリ五輪に関してそもそもスポーツ

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

が示す国威発揚的な要素にも平和的な要素にも否定的であることが示されたといえよう。肯定思考型の人達とは反対に、何事も否定的に捉える人達であった可能性もある。

興味深いことは、「平和の祭典」因子、「開催地悪イメージ」因子、「五輪批判」因子の3つで、日本卑下型と日本礼賛型の人達が同様の評価をしていたことである。日本卑下型の人達は、日本を誇らしいと思う気持ちが低く、コスモポリタニズム意識もやや低い人達、日本礼賛型の人たちは、日本を誇らしいと思う気持ちが高く、コスモポリタニズム意識が高い人達であった。パリ五輪を平和の祭典であったり、外国のイメージを高めるものとして評価しなかったとのは、コスモポリタニズム意識の低さ、いわば「外国嫌い」のゆえ、と説明することも可能である。しかし、日本に対する誇らしさが高い人達も低い人達も、同様にパリ五輪の「平和の祭典」的な側面を低く評価し、五輪を批判していたのは何故だろうか。日本卑下型の人達はもともと五輪そのものに対してネガティブな態度を持っており、五輪の開催は、五輪自体を望ましく思わないという自分達の「気持ち」が無視されたものとして考えていた可能性がある (cf. 有馬, 2025)。他方、日本礼賛型の人達にとっては、五輪はスポーツによって国の優位性を示すためのものであり、平和を促進したり外国の開催国のイメージを良くしたりするものとしては考えていなかったため、このような反応を示したのではないかと考えられる。実際、日本礼賛型の人達は、「スポーツの祭典」因子については、肯定思考型よりは低いものの、中庸型の人達と同様で、日本卑下型の人達よりも有意に高く評価していた。すなわち、五輪が国際平和を促進するといった平和の祭典的な側面については、五輪の掲げる高尚な理念に賛成・反対というよりも、それぞれの立場からの好き嫌いの表明に近い形で評価されたのではないかと考えられる。このように、一見、政治的な立場としては正反対の思想・信念を持っていると思われる人達が、政治的・文化的な事象に感情的なレベルで反応した場合、期せずして態度が類似してしまうことがあると考えられる。このことは、立場を異とする人々の間にも互いに共通点があることを示すことで相互理解を促進する契機となり得る一方で、人々の分断を互いに合理的に「啓蒙」することにより解消することの難しさを示しているともいえる。

4.4 まとめと今後の課題

本研究では、パリ五輪の開催に対するポジティブまたはネガティブな評価が、日本人意識およびコスモポリタニズム意識により異なるかを検討した。その結果、コスモポリタニズム意識が高いとパリ五輪の平和の祭典的側面に対して高く評価し、低い場合には平和の祭典的側面を低く評価するが、それは日本人意識が高い場合も低い場合も同様であることが示された。また、日本人意識が高いことは、パリ五輪に対する多面的な評価を一様に直線的に高めていたわけではないことも合わせて示された。このことは、世界市民であるという意識は、オリンピックのような国際大会がその理念として掲げる国際理解や世界平和の実現にある程

度寄与するが、ある国の国民であることを強く意識し、誇りに思うことは、その影響は単純ではなく、開催地の違いや自国民の競技成績など他の要因も関係している可能性があることを示したといえるだろう。

しかしながら、本研究には、留意せねばならない点がいくつもある。1つは、日本人意識やコスモポリタニズム意識を一般の人々がどのように捉えているかである。今回の分析では愛国心・ナショナリズム、日本の誇り、コスモポリタニズム意識に基づいて4クラスタを抽出したが、それぞれの尺度を詳細に検討すると、これらは単に「日本が好き」「外国が好き」という意識を測定しているに過ぎないかもしれない可能性も示唆される。すなわち、これらの尺度がナショナリストイックに日本の優位性を強く感じていたり、自身を世界市民として捉えているか否かを測定できていたか、というとやや疑問が残る。その結果、パリ五輪に対する態度についても、単に日本と外国に対する好き嫌いをそのまま反映しているだけ、という可能性も考えられる。さらに、今回の分類では愛国心・ナショナリズム、日本の誇り、コスモポリタニズム意識それぞれが平均的な人たちが約半数を占めており、多くの人々は、国民性や世界市民性を、改めて質問されない限りは、日頃さほど意識していないのではないか、ということを考えられる。

また、4.3でも述べたが、何事にも肯定的に回答する人達と何事にも否定的に回答する人達の回答傾向が、すべての項目で表れた可能性も考えられる。心理尺度の信憑性を高めるために、質問項目に逆転項目を含めることは推奨されているが（山岡、2023）、尺度の因子分析を行うと、作成者の意図に反して反転項目だけが1つの因子を構成することが起こる（cf. 日下部、三浦、2025）。すなわち、回答者が質問内容に対する賛否に関わらず、質問項目の意味合いが肯定的か否定的かのみに反応している可能性がある。しかしながら、このような反応はまた、「素朴なナショナリズム」「素朴なコスモポリタニズム（または排外主義）」が表れているとみなすこともできるだろう。これは、信念よりも感情をベースとした態度ということになる。今後、このような政治的な思想、また複雑な科学的事象、社会的な事象などに対する態度形成に感情がいかにかかわっているか、また、そのような態度の形成・変容にいかに感情面からアプローチしていくかが、検討課題として残されたといえよう。

〈引用・参考文献〉

- 有馬明恵（2025）. 東京オリンピック・パラリンピック開催をめぐる賛否の理由 山下玲子・有馬明恵（編著）「日本人」であることとメディア 日本人らしさの世論の社会心理学 pp.89-109. 効果書房
- Esposito, L. & Romano, V. E. (2014). Benevolent Racism: Upholding Racial Inequality in the Name of Black Empowerment. *Western Journal of Black Studies*, 38 (1), 33-43.
- 福岡聖也（2024）. 視聴データで振り返る『2024パリオリンピック』～全国32地区視聴人数ランキング、配信回数ランキング～VR Digest + 10月10日 <https://www.videor.co.jp/digestplus/>

国際スポーツ大会に対するイメージと日本人意識・グローバル意識との関係について

- s/article/tv241010.html (2025年10月3日最終閲覧)
- 岩田紀 (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討, 社会心理学研究, 4 (1), 54-63.
- Karasawa, M. (2002). Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An etic-emic approach. *Political Psychology*, 23, 654-666.
- 片岡真理子 (2024). 魔法にかけられた2週間:パリ・オリンピックを振り返る WORLD REPORTS パリ編 JAAA REPORTS 9月2日 <https://jaaareports.jaaa.ne.jp/post/world-202409> (2025年10月3日最終閲覧)
- 日下部聰・三浦麻子 (2025). 日本における「メディア不信」の構造 シニシズムを軸としたオーディエンスの態度分析 日本社会心理学会第66回大会発表論文集
- 共同通信 (2024). パリ五輪に「50億人関心」 IOC調査, 73%が成功 Yahoo! JAPAN ニュース 12月28日 <https://news.yahoo.co.jp/articles/20325232aaa551065c400121548e395a5bea9aba> (2025年10月3日最終閲覧)
- Ledsom, A. (2024). 「五輪の真の勝者」はパリ 観光客20%増、ホテル稼働率は80% Forbes JAPAN 8月7日 <https://forbesjapan.com/articles/detail/72940> (2025年10月3日最終閲覧)
- 毎日新聞 (2022). 東京五輪に3.7兆円膨張許した責任明らかに オピニオン 12月26日 <https://mainichi.jp/articles/20221226/ddm/005/070/017000c> (2025年10月3日最終閲覧)
- 村上直久 (2024). 最終赤字額は2兆3713億円…汚職と談合にまみれた「2021年の東京オリンピック」がわれわれに残したもの 後世に残すとされた「レガシー」は雲散霧消した President online 8月17日 <https://president.jp/articles/-/84495> (2025年10月3日最終閲覧)
- 村田光二 (2007). アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響 平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 日本経済新聞 (2024). 岐路のパリ五輪、冷める世界 「実利重視」バッハ氏の野心 五輪の未来下 パリ2024 7月15日 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQODH01A8T0R00C24A7000000/?msocid=1215a0cd967166c2322ab4f99753674c> (2025年10月3日最終閲覧)
- 日本オリンピック委員会 (2025). オリンピック憲章 2025年1月30日から有効 国際オリンピック委員会 <https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2025.pdf> (2025年10月3日最終閲覧)
- 日本オリンピック委員会 TEAM JAPAN パリ五輪 メダル・入賞者一覧 <https://www.joc.or.jp/games/olympic/paris/japan/winnerslist/> (2025年10月3日最終閲覧)
- Peene, S. (2024). パリを代表する象徴的な会場から男女平等まで、今回のパリ2024オリンピックを特別なものにするものとは? Olympic.com 7月25日 <https://www.olympics.com/ja/news/iconic-venues-gender-parity-what-makes-olympic-games-paris-2024-special> (2025年10月3日最終閲覧)
- 斎藤僚介 (2020). 現代日本におけるリベラル・ナショナリズム——潜在クラス分析を用いた実証研究—— ソシオロジ, 65 (1), 3-21.
- サンスポ (2024). バッハ会長「平和つなぐ大会に」パリ五輪開会式、団結を強調 パリ2024 7月27日 https://www.sanspo.com/article/20240727-3PTNL7XBKFNVPQUHUENAWARE/?outputType=theme_paris2024 (2025年10月3日最終閲覧)
- 「週刊文春」編集部 (2024). 柔道「ズルーレット問題」はなぜ起きた? 「決して民主的とはいえない手法で…」JOC 山下泰裕会長が痛烈批判していた国際柔道連盟“カジノ会長”の正体 週刊

- 文春オンライン 8月7日 <https://bunshun.jp/articles/-/72733> （2025年10月3日最終閲覧）
- スポニチアネックス（2024）【パリ五輪 競技別視聴率10傑】トップはバレー男子準々決勝 唯一大台23.1% 2位は女子マラソン 8月13日 <https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2024/08/13/kiji/20240812s00041000213000c.html?page=1> （2025年10月3日最終閲覧）
- Tamir, Y. (1993). Liberal Nationalism, Princeton: Princeton University Press (=2006, 押村高・森分大輔・高橋愛子・森達也訳 リベラルなナショナリズムとは 夏目書房)
- 田辺俊介（2016）特集概要 ナショナリズムの捉え方：概念図式による整理の試み 社会学年誌, 57, 1-21.
- 辻大介（2008）インターネットにおける「右傾化」現象に関する実証研究 調査結果概要報告書 日本証券奨学財団第33回研究調査助成報告書 <https://www.d-tsugi.com/paper/r04/index.htm> （2025年10月3日最終閲覧）
- 山岡明奈（2023）心理測定尺度の使い方・作り方 高橋尚也・宇井美代子・宮本聰介（編）心理調査と心理測定尺度 計画から実施・解析まで サイエンス社 pp.79-102.
- 山下玲子（2024）オリンピックイメージと日本人意識、グローバル意識との関係性についての一考察：2020東京オリンピック、2022冬季北京オリンピックとの比較から コミュニケーション科学, 60, 85-102.
- 山下玲子・有馬明恵（2025）「日本人」であることとメディア 日本人らしさと世論の社会心理学 勁草書房
- 読売新聞オンライン（2024）IOCのバッハ会長「夢を与えてくれてありがとう」…最後の五輪スピーチは約8分間 8月12日 <https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2024/20240812-OYT1T50027/> （2025年10月20日最終閲覧）

本研究は、2024年度東京経済大学共同研究助成費（研究番号D24-03）による研究成果の一部である。ここに記して謝意を表明する。